

釧路市スポーツ賞 (10/18)

木村 芳人 氏 (釧路バレーボール協会) 受賞



永年にわたってバレーボール競技の普及振興に貢献された釧路バレーボール協会会長：木村芳人氏（74歳）が、今年度の釧路市スポーツ賞を受賞されました。

木村氏は昭和28年釧路湖陵高等学校バレーボール部に所属以来56歳まで、通算25回に及ぶ国民体育大会や各種9人制全国大会に選手、監督として出場され、とりわけ昭和48年全日本産業人9人制全国大会で全国制覇、昭和55年栃の葉国体成年9人制

で全国第3位の活躍をされました。

また、国際大会の他、日本リーグや実業団9人制など数多くの全国大会を招致開催して大成功に導くとともに、全日本チームの強化合宿の誘致に尽力するなど釧路バレーボール協会役員として現在の隆盛の基礎づくりに貢献されました。

さらには、釧路のバレーボール50年の史実を纏めて「釧路バレーボール物語」を刊行するなど誠に大きな功績を残されました。

58年間、バレーボール競技をひたすら愛し続け、更なる発展のため現在もなお情熱をもって活躍されております。

体育施設の補修、備品整備要請

釧路市長・市議会へ (12/16)

釧路市体育協会は、新年度予算編成に向け、市内社会体育施設の補修改善・備品整備等の充実を



求める要望書をまとめ、蝦名市長と黒木市議会議長に特段のご理解とご配慮を要請しました。

スポーツ関係の13団体から上がった34項目の要望を盛り込んだ重点項目は、①湿原の風アリーナ釧路の施設・備品等の整備、②大規模運動公園内体育施設の計画的な補修、③他施設の早期補修・改善の3点。各競技団体からの体育施設の要望一覧も合わせて提出しました。

当日は張江会長はじめ北村、横地、北上の3副会長、高橋専務理事の5名が出席。張江会長は、釧路市では夏冬を問わず多くの大会が開催されているとともに、スポーツ合宿も盛んに行われるようになってきていることに触れ、「釧路市がスポーツのまちとしてさらに発展するようご配慮願いたい」と熱意を込めて述べました。

赤い羽根共同募金活動

社会奉仕活動 (12/4.25)

アイスホッケーアジアリーグ公式戦会場：釧路アイスアリーナで、赤い羽根共同募金に協力を求める声が響きました。



当日は張江会長はじめ、釧路市体育協会の理事ら多数の役員が正面玄関に陣取り、日本製紙クレインズvsチャイナドラゴンの観戦に訪れたファンに「ご協力をよろしくお願いします」と呼び掛けを行い、多くの善意が寄せられました。

この大会会場での募金活動は、福祉増進のため釧路市体育協会として少しでも役に立とうと昨年度から実施しております。また、全国小学生バドミントン大会会場である湿原の風アリーナ釧路でも募金活動が行われ、釧路トランポリン少年団の子ども達が保護者とともに参加しました。

釧路市体育協会と市民が一体となって取り組んだ成果としての募金総額27,896円は、翌26日に釧路市共同募金委員会へお届けいたしました。

平成23年度北海道中学校体育大会 (1/7~10)

第42回

北海道中学校スケート・アイスホッケー大会



釧路での開催は、平成21年の第40回大会以来2年ぶり。釧路市内の各会場でスピード、フィギュア、アイスホッケーの3種目が実施されました。

1月7日～10日の4日間、柳町スピードスケート場はじめ5会場で、全道140校から集まった480人の選手が熱戦を繰り広げました。

スピードでは、幣舞中の佐藤真由選手が500mと1000mで2冠を達成。フィギュアでは共栄中の中野沙優香選手が総合3位。アイスホッケーでは釧路西部チームが第3位の活躍をしました。



全国制覇をめざし、小学生集う

(12/24～27)

第20回全国小学生バドミントン選手権大会が4日間の日程で湿原の風アリーナ釧路で開催されました。北海道では初開催となるこの大会には全国各地から総勢1200名が出場しました。

開会式ではステージ上の全大会役員がサンタの帽子をかぶって参加選手を歓迎するとともにクリスマスプレゼントを全選手に贈るなど、大会を主管する釧路地区バドミントン協会の工夫と配慮の行き届いた運営ぶりは大好評でした。

釧路地区からは予選を勝ち上がった28選手が出場し、粘り強い白熱した試合を展開しました。



全道高校生、フットサルで競う

(1/8～9)

道内の強豪高校24校、総勢328名が湿原の風アリーナ釧路に集い、第23回全道ユース(U-18)フットサル大会が開催されました。

地元釧路市からは阿寒高と北陽高の2校が出場し、ファイトいっぱいの熱戦を繰り広げました。

8グループからなる予選リーグでBグループの阿寒高は、稚内高、柏陵高に対して計9得点を挙げ1勝1敗の成績でした。一方、Eグループの北陽高校は、根室高、旭川商業高に対し、力及ばず0勝2敗に終わりましたが、フェニックストーナメントでは8得点をあげる活躍ぶりでした。



野球をもっと楽しんで!!

釧路軟式野球連盟 会長 小畑 保則



釧路軟式野球連盟では、小学生から70歳代の高齢愛好者まで、一般68チーム、学童35チーム、中学27チームが参加

して、朝5時からの朝野球から、午後9時までのナイター野球等各種大会を、年間約500試合を行っています。

各種競技が盛んに行われていますが、日本では、野球は人気の高いスポーツです。野球用語である「ヒット」「アウト」「トップバッター」「セーフ」「続投」「ピンチヒッター」等の言葉は日常生活の中でも使われています。ある調査によると、クラブ・同好会に加入している男性のうち、22.7%が野球クラブ・同好会に加入しており、体育・スポーツ施設のうち13%（第2位）が「野球場・ソフトボール場」となっています。

また、釧路の夏は、野球を行うのに適しています。（亜細亜大学の合宿等の成果）

この気候を利用し、地域で野球を活用した活動が活発になるよう、さらには、競技人口が減っているなかで、如何に野球を楽しんでいただくかを課題とし、施設・設備の充実を願いつつ、スムーズな大会運営を進めてまいります。

老若男女で担う楽しいソフトテニス協会!

釧路ソフトテニス協会 会長 北上 俊一



現在の加盟状況は、32団体、581人。内訳は、一般160名、小学19名、中学233名、高校169名である。

協会事業は柳町テニスコートを中心に10試合、広里市民テニスコートで7試合実施、冬期間でも湿原の風アリーナ及び鳥取ドームで11試合とオールシーズン楽しむことができる。各試合とも年齢別のエントリーであり同年代と無理なく楽しめるのも魅力である。

また、会員の7割を占める学生等、裾野を広げる取組みとしてソフトテニスの楽しさを知ってもらうために講習会（8月）、技術力向上のため、北海道たんちょう杯に併せてヨネックス(株)に協賛いただき実施している講習会（2月）等を開催している。

課題としては、競技人口の減少が深刻な問題であり、今年度において中・高1校ずつで休部が生じている。上記講習会等学生向けの普及事業にも精力的に取り組んできているが、今後更なる競技人口の拡大を目指した活動を展開し、全体的な組織の活性化につなげていかなければならないと考えている。

よりよい運営をめざして

釧路卓球協会 理事長 小松 重知



当協会は、昭和21年に発足。現在54団体854人の会員を擁し、湿原の風アリーナを中心に大会を開催させていただ

いています。

23年度は「全日本カデットの部・北海道予選会／（中学生約1,100名参加）」を開催しましたが、立派なアリーナとスムーズな大会運営に評価をいただき、24年度は「インターハイ道予選会」、再来年は「社会人選手権・マスターズ道予選会」の当地開催が内定しています。

協会の長い歴史の中にも、効率的運営を目指した「常任理事制の導入」、年齢・性別を問わない「くしろリーグの開催」、さらに22年度からは、「年間ランキング賞」と「中学選手の通年強化の取組み」をスタートさせています。

また、昨年は会員の協力をいただき東日本大震災の被災地への義捐金10万円を拠出させていただきましたが、今後もスポーツのできる環境に感謝するとともに、社会貢献についても前向きに検討していきたいと考えています。

銃剣道と武道憲章について

釧路地方銃剣道連盟 顧問 船戸 俊雄



銃剣道は、柔道、剣道、弓道、相撲、空手道、合気道、少林寺拳法、なぎなた等と同じく、武道の一つです。

昭和52年、これら各武道連盟等に日本武道館が加わった10団体が、日本武道協議会を設立しました。昭和62年には、協議会により「武道憲章」が制定されました。

その内容は、①武道は、日本古来の尚武の精神に由来し、術から道に発展した伝統文化である。②武道は、心技一如に則り、礼を修め、技を磨き、身体を鍛え、心胆を練る修行道・鍛練法である。③武道は、その特性を今日まで継承し、日本人の人格形成に役割を果たしている。と、あります。

さて、銃剣道は「突く」「払う」「かわす」「押す」及び「足さばき」の動きからなり、身体操作の俊敏さが養われ、青少年には極めて有効です。

昨今、趣味の多様化や少子化現象などいくつかの要因による競技人口の減少が続いており、武道界にとっても大きな課題として捉え、関係団体皆様と連携して解決していきたいと考えます。

鉚路市冬季体育祭総合開会式は「まなぼっと」で開催

(アイスホッケー・カーリング・長靴アイスホッケー・フィギュア・スキー) (12/9)

第66回鉚路市冬季体育祭の総合開会式が、鉚路市生涯学習センターで開かれ、集まった100名の選手らが熱戦を誓い合いました。

開会式では、昨年度の覇者がそれぞれ優勝杯を返還。大会委員長の張江鉚路市体育協会長から「鉚路は冬季スポーツのメッカ。選手一人一人が子供たちを啓発してほしい」との激励がありました。

その後、鉚路厚生社IHCの神長聡主将の選手宣誓で、氷上と雪上競技の幕開けとなりました。

冬季体育祭は3月までに、5つの種目が競技会を開催し、約2500人の選手が参加しました。



冬季の各種目は、次の日程で行われました。

- アイスホッケー 12/12～1/31 (鉚路アイスアリーナ他)
- カーリング 1/29 (柳町アイスホッケー場)
- 長靴アイスホッケー 2/25・3/3 (柳町アイスホッケー場)
- フィギュア 3/17～18 (春採アイスアリーナ)
- スキー 3/11 (阿寒ロイヤルバレイ)



管体協 資質向上研修会 (11/26～27)

鉚路管内体育協会連絡協議会が主催する「資質向上研修会」が、湿原の風アリーナ鉚路で開催されました。70名の各市町村体育協会会員は、「スポーツとか・ら・だ」について、今後のトレーニングや指導に生かすため熱心に研修しました。

2日間の研修では、鉚路皮膚科クリニック院長の足立功一氏、鉚路市スポーツ振興財団社会体育指導員の佐藤裕子氏、鉚路短期大学准教授の山崎美枝氏が講師となり、具体的で実践に役立つ講義や実技指導をしていただきました。



スポーツ少年団体力テスト会 (2/4)

鉚路市スポーツ少年団は、本年度の後期体力テスト会を湿原の風アリーナ鉚路で実施しました。

体力テストは「立ち幅跳び」「上体起こし」「腕立て伏臥腕屈伸」「時間往復走」「5分間走」の5種目からなり、運動の基礎となる行動体力を総合的に測定し、その結果は今後のトレーニングでレベルアップの基礎データとして活用されます。

野球、柔道、体操、少林寺、トランポリンの小学生団員142人が指導者や父母協力者のアドバイスを受けながら頑張りました。



編集後記



呼吸を荒らげ、懸命に腕を振り疾走するは体力テストの一場面。どの団員も体力の限界に挑戦している。子供よ、体を鍛えろ、心を磨け、そして、スポーツを生活化せよ▼行き先不透明なこの時代。とにかくあの子供の健やかな成長こそが、私たち大人にとって最大の希望なのである。子供はみんなの財産であり、誰もが子育ての主役者として関わっていくべきである▼これからのスポーツ少年団の将来像を検討するプロジェクトメンバーは、日本スポーツ少年団の理念に「スポーツで手をつなぎ、地域づくりに貢献する」ことを新たに付け加えた▼鉚路市では、スポーツを通じて健康で活力に満ちたまちづくりに取り組んでいる。これをさらに進めるため、全小学校下で地域ぐるみの体力づくりを行っている「地域スポーツ推進協議会」から「総合型地域スポーツクラブ」への移行が進められている▼「総合型地域スポーツクラブ」は、幼児から小中高生、そしてその親達を含めた地域住民すべてを対象にして、それぞれの年代・志向にあった様々なスポーツや文化活動が行える組織・環境づくりを目的としており、スポーツ少年団が目指すところと共有できる部分が多い▼今後、「総合型地域スポーツクラブ」とスポーツ少年団はいっそう連携・協力を強め、それぞれが独自に有する課題や実状に応じ、市内各地で具体的な地域づくりを展開していくよう期待している。